

お願い、俺と恋に落ちてよ

第一話 雨夜の月

一眼レフのレンズを下から支えて持つ、男らしく筋張った、大きな手が好きだ。

カメラを手にした時、彼が被写体を見つめる目は、いつもの穏やかなものとは少し違う。温かく見守る父親のような目を見せる時であれば、獲物を捕らえる肉食獣のように鋭い時もある。

じっとその横顔を見つめていたら、気づいた彼がカメラを下ろして苦笑いをした。

『美優』

名前を呼んで、私の頭を引き寄せて髪を撫でてくれる。旋毛にキスをして髪を梳き、耳にかけてくれる繊細な指先。

『何か、哀しいことでもあった？』

優しい言葉しか紡がない、その唇。

その持ち主である彼の名前を私は知らない。

だからきつと、いつまでもふたりの隔たりを埋めないでいられた。けれどももしこの距離を、あなたが埋めると言うのなら。

『貴女を救ってあげるから、俺と恋に落ちてよ』

その言葉を、本当に信じていいですか？



スマホの短い着信音で、はっと意識を呼び戻される。どうやら、彼を待つ間に微睡んでしまっていたらしい。

ソファの背もたれに身体を預けたまま、瞼だけ開いて壁の時計を確認する。時刻はもう、二十二時を過ぎようとしていた。

……また、帰らないってことかな。

この時間に、さっきの短い着信音はメッセージでの連絡に違いない。見なくても、わかる。彼からの一方的な、キャンセルの連絡だ。深く溜息を落とせば、少しは気持ちの澱みも消えるだろうかと思っただけ、上手くいかなかった。

目を閉じると、聴覚だけが敏感になる。夕方から降り始めた雨が、今もまだ降っているようだった。

「……どこか行きたいな」

独り言を零す回数が増えたことに気がついたのは、もうずっと前。このマンションにひとりにされる時間が長くなればなるほど比例して増える。

シフト表を頭に浮かべて溜息をついた。

「仕事だしなあ。せめて夜勤ならよかったのに」

朝から仕事じゃ、この時間から飲みに行くわけにもいかない。ならば……大人しくここで眠るしかないのだけだ。

もう一年、ここに住んでいる。だけど、ここは私の家じゃないと、いまだにそう思ってしまう。

さっきは無視したスマホに、手を伸ばして画面表示を確認した。思った通り「宮下克之」の名前と『悪い、帰れなくなった』の一言だけが虚しく浮かび、私は苦笑いをする。

「悪いなんて思ったくないにせよ」

私が改まって話したいと言ったから、逃げたのだ。

そうに決まってる。

元いたマンションよりも高級な住処を与えて、たまに相手をしてやれば私がここに大人しく困われていると思っただけ。家なんかじゃない、こんな場所、ただのケージだ。

——やめた。考えたら変になりそう。

堪らなく息苦しくなって、私はソファから起き上がるとバッグを手に玄関を飛び出した。

多分今日はもう、克之さんは帰ってこない。

私からの別れ話を聞きたくないから。

私、綿貫美優が克之さんと付き合うきっかけになった夜も、こんな雨だった。彼はこの街で一番大きな医療センターに勤める外科医だ。私は看護師として病棟勤務をしている。二年前の雨の夜、準夜勤務後で帰宅するところ傘がなかった私に声をかけてくれた。宮下先生といえど、私達看護師の

中でもとびきり評判の良い若いドクターだった。

若い、といつても当時すでに三十四歳だ。けれど医療の仕事では、その年齢はまだ駆け出しのイメージが抜けない。

なのに彼と同年代や研修を終えたばかりの新人でも、『医師』というステータスを得ただけで看護師に威圧的な態度をとる人もいる。

だけど宮下先生は、違った。私達にも気遣いを見せてくれるし、医師としても積極的に手術や術前検査にも顔を出し技術と知識を吸収する。

だから本部長クラスのドクターからも信頼が厚い。

加えてイケメン、背も高い。そんな人が、私の名前を覚えてくれていると思わなかったから、驚いた。

『車を出しても良かったんだけどね。そうしたら話す時間が短くなるから』

当直中で、すぐ近くのコンビニまで買い物に行く途中だったらしい。歩いて十分ほどの距離とはいえ、私の家はコンビニとは反対方向だったのに。

いたずらっぽく笑った彼は壮絶に色気があった。それでいて、七つも年上の男の人なのに少しだけ可愛らしくも見えた。女慣れしている誘い方だとは思ってたけれど……憧れのドクターと個人的に話せたことが嬉しくて舞い上がってしまったのを覚えている。

その後、何かと声をかけられ話す機会が増え、付き合うようになった。話すたびに惹かれた。彼

は医師として高い志を持っていたし、そのための努力もしていた。どれだけ激務で睡眠不足だったとしても、緊急の呼び出しには嫌な顔ひとつ見せずに応じる。

ドクターとして尊敬に値する人で、同時に強い野心も持った男の人だった。

二年付き合ひ、私は今年二十九歳だ。結婚も意識する年齢だけれど、彼にそれを押し付けたことはないし、悟られないようにしていた。彼が今は結婚よりも仕事のこと頭がいっぱいなのはよくわかっていたから。

だけである日、信じられないような噂を耳にしてしまった。

最初にその噂を聞いたのは、一年ほど前だろうか。そのことを思い出すたび、胸が苦しくなる。別れたほうがいいのだ、多分。

彼がのらりくらりと私の話をかわすのは、あの噂が真実だということの裏付けになるのだろうと、理性ではわかっている。

だけど、どうしても、情が邪魔をする。

冷静な判断力を鈍らせる。

話をかわされているのじゃなくて、ただいつも通り忙しいだけなのかもしれない。あんなのはただの噂だから振り回されるなど言った、彼のその言葉を信じたい。

会える日が、減っているような気がする。

連絡がつかない時間が増えているような気がする。

カレンダーを数える夜が増え、こんな風に家を飛び出すことももう何度目になるかわからない。

仮住まいにしか思えない克之さんのマンションを飛び出して、どこに向かうだとかは考えていなかった。

雨音に混じって背後から車の音が近づき、ヘッドライトの光が私を追い越していく。少し遅れてダークカラーの車体が真横を通り過ぎ、撥ねた水が足元を濡らした。

「うわ、最悪」

あの日と違って私の隣には誰もおらず、またしても聞く人のいない独り言で悪態をついた。

ああ、やだ。

なんだか余計に、惨めで寂しい。これ以上雨の中にいたら、孤独でおかしくなりそうで、濡れた靴の中の不快感を踏みしめながら先を急ぐ。

ひとりで飲みに行くのも躊躇われ、迷った私は以前住んでいたマンションに向かうことにして、住宅街を歩いた。そこなら、つい最近まで友人が住んでいたから、ベッドもあるし、まだ電気も水道も通っている。

元々その友人とルームシェアをしていたマンションだ。私が克之さんと暮らすようになってからも、条件が良い物件だったので友人はひとりで住んでいた。

その彼女も結婚が決まり、婚約者のマンションで同棲を始めて出て行った。今は、私が買った家具が残っているだけのはずだ。

——どうせ、一度見に行かないといけないと思ってたしね。

そんな風理由を作れば、行くあてもなく飛び出すしかなかった悔しさも、少し紛れるような気がした。

がした。

足元を見ながら歩いていくと、正面玄関へと続くコンクリートの外階段が視界に入る。段差の低い、慣れないと少し違和感のある階段を上るのは、いつぶりだろうと上を見上げた。

「……？」

街灯が照らすギリギリのところくらいに、人が座っているのが見えて一瞬だけ足がすくんだ。それでも一応上り始めるものの、私はそっと人影とは反対側の端に寄る。

といつても、それほど幅がある階段じゃないから、同じ高さくらい上れば手が届いてしまう距離になる。

一瞬、他の入り口を使うべきだったかと後悔した。裏に回れば、駐車場側に出る道もある。そう悩んでしまうのは、どう見たって異様だからだ。近づくにつれ、男性だと認識できた人影は傘もささず、濡れ濡れだった。

あんなところに腰下ろして、お尻冷たくないのかな、とか、不気味だと感じている割に余計な心配をしてしまう。

あと少しで同じ高さまでくる、という時だった。どうやら、階段のすぐ傍に植えられている木の枝で、雨宿りをしているつもりだったのだろう。その男の頭上に、いきなりたくさんの雨粒が落下した。

「うわっ」

多分木の上で枝が揺れて、葉っぱに溜まった水滴に襲われたのだ。うわ、気の毒……と、つい目

線を向けてしまった途端、私の歩みが鈍くなる。

空を見上げる男の横顔に、くぎ付けになったからだ。息を吸うのも忘れるくらい、美しい顔立ちだった。まるで彫刻のような綺麗な横顔の輪郭。

「ははっ」と、苦笑した男が私の視線に気がついてこちらを向いた。

時間の流れが変わったんじゃないかと思うくらい、スローモーションの視界。目を合わせて数秒、固まった私にゆったりと彼の唇が弧を描く。首を傾げて顎を引き、上目使いの三白眼が私を見つめる。

髪を濡らす滴が明かりを反射して、光が揺れた。

「……きゃっ！」

男に気を取られすぎたせいか、足元の感覚が鈍って踏み外したように膝がかくんと折れる。そのまま前のめりに倒れそうになって辛うじて手すりを掴んだが、傾いた鞆からバラバラと中身が零れ落ちてしまった。

「やだっ、最悪！」

絵画の中にいたような感覚から一瞬で現実に戻され、目の前に落ちたスマホや手帳を慌てて拾い上げる。

このスマホ、防水になってるよね？

傘を首と肩の間で挟んでしゃがみ込み、膝の上でハンカチを広げて画面を拭く。今のところ支障はないようだった。

「ここにも落ちてるよ」

「えっ」

顔を上げると、いつのまにかすぐ傍に男がしゃがんで、レジンのキーホルダーがついた鍵を拾い上げてくれた。青く透明な球体のレジンが大きな手のひらの上で転がって、何かを確かめるように男は首を傾げる。

「……あの？」

「あ、ごめんね。傷がつかなかったかと思って」

差し出された鍵を受け取りながら、笑うとまるで花が咲いたようだと思ってしまった。男の人のに。

「大丈夫？」

「ありがとうございます。あなたこそ、大丈夫です？」

ふたり向かい合ってしゃがんだ状態で、ずぶ濡れの男の人に心配されたのがおかしくて、くすりと笑いながら問い返す。

あー……やっぱイケメンって得だな。

さっきまで警戒してたくせに……

人のよさそうな笑顔ひとつで、なんとなく良い人のような気がしてくる。女って簡単なな、と自分のことながら内心で苦笑した。

「知人を待ってたんだよね……マンションの入り口で立ってたら、出入りする人に不審がられて仕

方なく、ココ」

「だからって雨の中ここを選ばなくても……」

「その時はまだ降ってなかったんだよ」

ほんと参ったよーと、へらりと笑う男に私は呆気にとられてしまう。だって、雨が降り出したのは夕方だ。それ以前から待つていたのなら、もう……六時間は経っている。

だったら降り出した時に移動すりゃいいのに、とか、ちよつと歩けばコンビニがあるからせめて傘でも買いに行けばいいのに、とか。

突っ込みどころはたくさんあるけど、なんだか突っ込む気力も湧かない。ただ、余りにも不憫になって、私は持つている傘の柄を男に向けて押し出した。内側に桜の花びらが舞う、お気に入りの傘だけど仕方ない。

男は差し出されるままに受け取って、ぱちぱちと瞬きを繰り返した。

「いいよ、もう今更だし」

「だからって、そのまま放置できないし。いらなくなったらエントランスの端にでも置いといて」

そう言い捨てて返事も聞かずに階段を駆け上がり、マンションのエントランスに飛び込んだ。うしろから、ついてくるような足音はしなかった。

ちよつとだけ良いことをしたような気分になって、沈み込んでいた心がほんの少し高揚する。たんたん、とリズム良く二階まで上がって、久しぶりの我が家の前に立ち、手の中の鍵を差し込んだ。青いレジンのキーホルダーをつけた鍵は、一緒に住んでいた友人の夏菜に返してもらったものだ。

記憶を辿れば、思い出したいくもない胸の苦しさにまで届いてしまう。私は思考回路を断ち切るように、差し込んだ鍵を回した。

「あ、綺麗にしてくれてる」

室内は、私がここを越した後から、さほど変わっていないかった。大型の家具はそのまま、配置もまったく変わっていない。後から夏菜が買い足したものはすべて持って行ったか処分したようだ。けれどひとつ、覚えのないものがあつた。ソファの隅に立てかけられたコルクボードだ。処分しそこねたのか忘れていったのだろうと手に取ると、いくつも写真が貼られていた。

夏菜は大学の頃から写真を趣味にしていた。といつても、学生の遊びの延長だと本人は言っていたけれど。

ボードに貼られた写真は、風景写真がいくつかと夏菜の友人だろうか。男女入り交じった写真もあつた。

「……えっ？」

驚いて、思わず間近で確認してしまう。なぜなら、そこにはさっきの男……ずぶ濡れの綺麗な男が写っていたから。

どこかの観光地だろうか。

仲間内で撮影旅行にでも行った時の写真？

もしかして、さっきの男が待ってた知人って夏菜のこと？

急いで窓に駆け寄りカーテンを開けた。リビングの窓から、あの階段は良く見える。だけど、街灯の下あたりにいたはずの男は、もうそこにはいなかった。

「どうしよう、夏菜に連絡したほうがいいのかな」

もしかして夏菜の婚約者だろうか。今は一緒に住んでいるはずだけど、もしかして、喧嘩けんかでもして夏菜が家を飛び出したとか。そうでなければ、あんなところで夏菜を待つてず濡れになんてならないだろうし。

スマホを弄いじって、彼女の番号を見つけ発信しようとした時だった。ピンポン、と少し安っぽいと前から思っていたインターホンの音が鳴った。即座にさっきの男だろうと玄関に向かいドアスコップから外を覗くと、思った通りの端整な顔が魚眼レンズで少し歪ゆがんでそこにある。

「はー」

扉は開けないままに声を出すと、少し戸惑った返事があった。

「あ、えー……つと。君は、なっちゃんの友達？」

男の口から夏菜の愛称あいしょうが聞けて安心した私は、鍵を外して扉を開ける。扉越しでなく互いを確認して、男は嬉しそうに破顔した。

「やっぱりさっきの人だ。あの後すぐになっちゃんの部屋の明かりがついたし、それに」

男は扉が閉じないように手を添える。けれど、押し入るような雰囲気は感じなかったから、また

ひとつ、私は警戒を解いてしまう。

「さっきの、ブルーのキーホルダー。見覚えあったから」

「あ、あれ。そう、夏菜に貸してたやつ」

「え、なっちゃんのじゃないの？」

「うん、だから……越してつた時に返してもらったんだけど」

そう言うと、男は「えっ」と綺麗な目を見開いた。

「なっちゃん、もうここに住んでないの？」

そのセリフと同時に、彼が夏菜の婚約者ではないとすぐに悟さとる。ふたり、なんだか途方に暮れたような顔を見合わせた。

「じゃあ、彼は、誰だ。」

友達か、何か？

咄嗟とつさにその疑問を彼に投げかけようかと思っただけれど、写真に写った夏菜を見て考え直す。この男に聞くよりも夏菜に聞くべきだろうと、私は開いたままだった夏菜の番号を親指でタップした。

『美優？ どうしたのこんな時間に』

「ごめん遅くに。今、彼と一緒にいるの？」

念のため、夏菜がひとりかどうかを確認する。その間に、共用廊下で人の気配がして、人目を憚はかってか邪魔になると思っただ、男が一步玄関に足を進めた。

……あ。と、思っただ時にはもう遅くて、男の背後で玄関扉が音を立てて閉まる。

「夏菜、今、男の人がマンションに来てる」

『え？ 誰？』

「えー……と、夏菜が残してた写真に写ってた人。えらく綺麗きれいな」

間近で、男の顔を見上げた。家に入れてしまった……という、後悔は不思議と生まれなかった。

狭い玄関に、ふたり。夏菜と話す私の声が響く中で、コツ、と音が鳴なって俯うつむいた。私がさつき貸した傘が立てかけられて、三和たたく土きに小さな水溜りが作られる。

『あ……もしかして』

『どうしたらいい？』

一体ふたりはどういう関係だ？ ずぶ濡れになって夏菜に会いにきた、それだけで酷ひどく勘繰かんぐってしまふのは邪推じよすいだろうか。夏菜は少し考えた後、電話を代わってくれと言った。

「夏菜が話したいって」

顔を上げてスマホを差し出すと「うん」と頷いて、私の手からスマホが抜き取られる。

「……なっちゃん？」

余りに優しい声で名前を呼ぶから、きゅんと胸が締め付けられたように苦しくなった。男と立つこの距離に耐えられなくなって、私は逃げるように室内に上がり洗面所からバスタオルを取って戻ってくる。

うん、うん、と頷きながら話す男の声は穏やかで優しくかったけど、感情は余り窺うかがえない。

「わかった。結婚おめでとう、なっちゃん」

男が最後にそう告げたことで、ふたりの関係が尚更よくわからなくなる。スマホを返されて、代わりにバスタオルを差し出した。耳に当てると、まだ繋がったままだ。

「話は終わった？ 帰ってもらおうよ」

ふたりの関係を聞きたい気もするけど、それは後日つついてやれば済むことだし。とにかく今は夏菜にそう伝えることで目の前の男にも『帰れ』と言ったつもりだったんだけど。

『う……ん。けど、その人行くところないと思う』

『は？』

行くところないって……家がない、実家がない、とか？

意味を測りかねる私をよそに、夏菜は何かを振り切るような声で言葉を繋ぐ。

『でも、追い返してもらっていいから。私ももう、どうもしてあげられないし……』

「あのね……だったら『行くところない』なんて私に教えないでよ」

どうして欲しいのよ……

そう突っ込みたくなるくらい夏菜が男に情があるのは伝わるけれど、それはズルい。追い出す決断を私にゆだねられても困る。

『あ、誤解しないで。変な関係じゃないのよ、友達ではあるんだけどあんまりよく知らないとか……』

「よく知らないけど、友達なの？」

私にはその感覚がよくわからない。追及したいけれど、してしまえば余計にこの問題に首を突っ

込んでしまうことになって、否応なく巻き込まれる、そんな気がする。

『私も旦那になる人と一緒だし、旦那カメラとかあんまりで。もう泊めてあげられないんだよね……うん、だから帰ってもらって』

「ってことは過去に泊めたことがあるってこと？」

『だから誤解しないでって！ 確かにあったけど、その人だけじゃなくカメラ仲間何人かだったり仲間内で……あっ、あの人が帰ってきたから切る。ほんとごめん！』

「ちよっ……」

彼女の背後で物音がして、通話が切れる寸前話し声は確かに聞こえた。だけどなにやら面倒ごとを押し付けられ逃げられた感はない。

「もう……どうすんのよ」

目の前には、バスタオルを被った男がわしわしと髪を拭いて……私のぼやきに反応してタオルの隙間から目を覗かせる。

ぐっ……と、出かかった言葉を呑み込んでしまった。綺麗な目にじつと見られたら、まるで継がれているような気になってしまっ

て。

いやいや、だからって。

「どうしようもないでしょ、うん」

「うん、ごめんね？ 悩ませて」

奇妙にそんな風に言われたら、尚更胸が痛むんですけど!?

『行くところないと思う』

夏菜の言葉が、どうしても気にかかる。だけど、駅に行けば、電車はまだギリギリある時間だし、子供じゃないんだから泊まる場所くらい自分で見つけるでしょう。

ちくりちくりと胸を刺す罪悪感を宥めながら男を見上げてみると、タオルがするりと外されて、男の顔が露わになった。

見れば見るほど綺麗な面立ちに、つい見入ってしまう。年は、私と年代くらいだろうか。もしかしたら年下かもしれない。榛色の髪は染めているのかとも思っただけど、どうやら地毛で色素が薄いのだろうとわかった。瞳も同じ色をしていたから。

「ありがとう、タオル」

「あ、ううん」

「ひとつだけ、お願いがあるんだけど……」

濡れたタオルを受け取りながら無言で首を傾げると、男は足元の傘を指差して言った。

「もう少しだけ、これ貸してくれないかな？ 雨が上がったり返すから」

「いいよ、もちろん。持って行って」

行く当てを尋ねる言葉は、出すに出せなかった。

ないよ、と言われたって私にはどうすることもできないし、そう思えば無責任に聞くこともできない。そんな薄情な私に男はやっぱり、人のよさそうな笑顔で言うのだ。

「ありがとう、すごく助かるよ」

「いえいえ、それくらいしかできなくて」

お礼なんて言われると、こっちが申し訳なくなつて困る。平静を装うけれど、胸中は激しく葛藤している真つ最中だ。

ちくちくからずきずきへと、彼の笑顔は私の罪悪感を激しく煽つてくれてその効果は絶大で。頭の中は理性とは反対に働き始めていた。

知らない男とはいえ、夏菜の知り合いには違いなさそうだし。

自分の貴重品なんかは全部克之さんのマンションに移してあるんだから、私が困ることは何もない。

たった一晩、この男に貸すだけなら。

「じゃあ」

男が一度頭を下げ、背中を向ける。傘を手に取り、出て行こうとするギリギリまで逡巡していたけれど。

「……待って！」

結局引き留めてしまつて、『あーあ』と心の中で嘆息する。そうなつたらもう引けなくなつた。振り向いてきよんとした、その無害そうな表情が、私のお節介心を刺激する。

「……とりあえず、入つて」

「えっ？」

「行くところないなんて聞いたら、ほつとけないじゃないの」

言えばふにやりと破顔する、それを見て。

——期待してたね絶対。

男の性質の悪さを、なんとなく確信した。入つて、と促したものの男の足は靴下までぐつしより濡れていて、靴を脱ぐとつま先からぼたぼたと滴が落ちる。

ああ、もう！

どこまでも面倒な！

「シャワー！」

「えっ」

「入つて、濡れた服は乾燥機使つてくれていいから」

濡れた足で三和土から上がつていいものか、ぐずぐずと逡巡している男の腕を引っ張ると、リビング手前のアコーデイオンカーテンを開け押し込んだ。

「電気は……」

そこ、と指差そうとしたら、男が先に迷わず電気のスイッチに指を伸ばしたのを見つてしまう。

ああ、そうか。やっぱそういう関係だったのかな。指先が迷わず電気のスイッチを見つければ慣れた回数、ここでシャワーを浴びるような、関係。

妙に生々しいものを見てしまった気がして、ぴしゃりとアコーデイオンカーテンで空間を遮断した。

「……迷惑かけてごめんね？」

カーテン越しに男の声が聞こえ、濡れた服を脱いでいるのが音と気配で伝わった。私は反転して軽くカーテンに背中を預ける。

「一晩だけね。明日にはちゃんと行く当て見つけて出てって」

「わかった」

「どつかあるでしょ？ 親兄弟とか、友達とか」

「うー……ん」

「あ、やっぱりいい！ 聞かないことにする！」

「あはは、賢明な人だなあ」

邪気のない笑い声でそう言った。

なんだろう、この男の絶妙な加減は。すり寄るでも押し入るでもなく、ただそつと服の袖を引くような……諭えるならそんな甘え方。

「……なんか深入りしたら面倒そうだもん」

「なのに泊めてくれるなんて、優しいね。ありがとう」

さらりと、そんな言葉も忘れない。不覚にも鼓動が跳ねたのを、小さく咳払いして紛らわせた。

「じゃあ、私は行くけど、出て行く時は鍵を締めて新聞受けに入れてくれたらいいから」

「えっ、あなたは？ どこに……」

「私は他に帰れるところあるから」

そう言ってアコーディオンカーテンから離れて玄関へ向かう。向こうにいたくないから雨の中わざわざ出てきたのに……とんぼがえりになるなら大人しくお布団にくるまって寝たら良かった。

どつと疲れを感じながら靴を履こうとしたら。

「あつ、待って待って！」

焦った声で引き留められてうしろを見る。すると男が裸でカーテンから上半身を覗かせていた。

「ちよつと！ 素っ裸で出てこないでよ！」

「あ、ごめん。だからちよつと待って」

慌てて目を逸らしたけど……うん、すつごく良い身体してたかも。顔も綺麗で手足も長くて身体は引き締まってて。モデルさんって言われても驚かないかな。

眼福眼福、と思いつつ今度こそ靴を履く。

「で、何？ 帰って早く寝たいんだけど」

「こんな夜遅くにひとりで出たら危ないよ、俺、何もしないから」

そう言ってくれた言葉は、嘘には聞こえないけれど。それをそのまま鵜呑みにするほど、私は無防備でもないし人も良くない。だから、まだ水が滴る傘を手にとって、背中を向けたまま言った。

「大丈夫よ、ついさっきまでひとり歩いてきたんだし、そんなに遠いとこじゃないから」

じゃあね、と片手をあげて私はそのまま振り返らずに玄関を出る。扉が閉まる瞬間、「ありがとう」と聞こえて、私は少し頬を緩ませた。

結局元いたマンションに戻るしかなかったけれど、なんだかおかしな体験をしたこともあり、気分転換には十分だったらしい。

暗い夜道を、行きとは比べ物にならないくらいに軽い足取りで歩きながらマンションに着き、部屋に入ると消したはずの電気がついていて。

「……克之さん？」

見慣れた革靴が目に入り慌ててリビングに駆け込むと、彼がジャケットを脱いで椅子の背もたれに掛けていたところだった。

「美優、どこに行ってたんだこんな遅くに」

本当に、心配してくれていたのかもしれない。眉をひそめた克之さんに近づくと、突然腕の中に抱きしめられた。その体温にそのまま身をゆだねてしまいそうになるのは、何も知らずに好きでいられた頃の名残だ。

けれど、自分が別れ話のために彼に会いたかったのだということを思い出し、はつとする。ふたりの身体の間を手を割り込ませて、少しでも距離を取ろうとした。

「克之さんこそ。会えないって、言ったのに」

「ごめん、急患が入って。でも落ち着いたから」

ほんとに急患だったのかな？

実際、急患や受け持ち患者の急変で家に帰れないことが極端に多い仕事だ。だから彼は、家とは別に病院のすぐ隣のこのマンションを買ったのだと言っていた。

そして、すれ違いになりやすいから少しでも一緒にいられるようにと、私をここに住まわせてくれた。
後から思った。

彼はまだ独身だけれど、私への対応はまるで愛人のようだ。だから病院内に流れた、彼が婚約するという噂を聞いた時に、納得した。

ああ、彼は私を、一生を共にする相手とは見ていないのだと、実感できてしまった。

「じゃあ、今日は話せる？」

抱きしめてくる彼から逃れるために、軽く腕を振る。すると、途端に克之さんの機嫌が悪くなる。

「話って、またあの話か。気にすることはないって言ったはずだ」

「気にならないわけがないよね？」

この話はこれで二度目だ。

婚約するのなら、私は克之さんとは別れると言った。しかし彼は、見合いをただでそんな噂が流れたに過ぎないと誤魔化した。

一度は彼の言葉を信じようとした。けれど、すぐに疑心暗鬼に囚われる。ただでさえ激務で会う機会も少ないのに、最近はそれが更に減った気がした。電話の回数も少なくなった。今では、メッセージの既読もつかないまま数日過ぎる時もある。

見合いをすることも聞かされていなかったし、彼が野心家だということも良く知っている。見合い相手は、院長の孫娘だった。

私が退かないとわかると、彼は煩わしそうに腕を解いて背を向ける。

「急患だったと言っただろう。疲れてるんだ」

シャツを脱ぎながら、そのまま寝室に消えてしまう彼の背中を目で追いかけるけど、足はついていかなかった。

機嫌が悪くなった時の彼は、頑なで怖い。私を見る目も威圧的になって、いつも言葉が出なくなる。溜息を吐いて、ベランダに繋がる大きなガラス戸の前に立った。

雨脚が強くなり、風も出てきたのか雨粒が窓に叩きつけられてくる。流れる滴を見ながら、自分は彼に何を話したいのだろうと途方に暮れる。

別れるだけなら、私がかから出て行けば済む話なのに。

院内で会うことはあっても、私達の付き合いは秘密にしているから表立って彼に何か言われることはない。

それでも、ちゃんと話をしようと思ってしまうのは、彼に未練があるからだろう。見合いだけで婚約はしない、ともう一度聞いて安心したいのだろうか。

「……別れたいの、別れたくないの、どっちなの」

彼は医療のことになると貪欲になる。患者に対してはとも誠実だけれど、自分にも厳しく、常に上を目指している。力がなければ、思うような治療もできない。新しい技術や技法を取り入れたり、そのための設備など、さまざまなことに関心が口出しできるだけの力が欲しいのだと彼は言っていた。

たとえ、今回は本当に見合いだけだったとしても、今後はどうなるのかわからない。いつか私は、彼の野心に負けて切り捨てられてしまうのじゃないか。

それが今か先かの違いだけで。

ふるりと頭を振って思考を切り替えた。焦点を窓ガラスの雨粒から、遠くの空に向ける。真っ黒く濃んだ夜の夜空には、今は何も浮かばない。

頭に浮かんだのは、ずぶ濡れになっていた綺麗な横顔。空を見上げて雨粒を浴びていた姿と、それを照らす白い月明かり。

一体どんな遺伝子を持つてるんだろう。

「美優？ どうした？」

声がして振り向くと、ルームウェアに着替えた克之さんが立っていた。少し機嫌が回復したみたいだけれど、今はもう一度話を切り出す気力がない。

「んー、お月様が綺麗だったなって」

「月？ 雨降ってるのに？」

「……あれ？ ほんとだ」

なんで私、月だなんて思ったんだろう。

思い出すのは、綺麗な横顔と私を見た三白眼、濡れた髪が白い光を反射して目を奪われた。

「あ、そうか」

その白い光は、ただの街灯だ。それなのに脳裏に浮かべると妙に美化されて、勝手に脳内で月明

かりだと変換されていた。

だってまるで映画や絵画を見ているような、そんなワンシーンだったから。

「何？」

「うん。街灯の下で見つけた花がすごく綺麗だったから、照らしてた白い光が月明かりに思えただけ」

うん、嘘はついてない。

彼の造形は、ただの街灯をお月様に格上げしてしまうくらい綺麗で……

「美優」

克之さんが目の前にいるのに、別の何かを思い出して遠くを見る私に、本気でむっとしたみたいだった。顔を傾けて近づいてくるキスの気配に、私は咄嗟にそれを避けてしまう。

「ごめん。私も着替えてくるね」

彼の手から逃れて、何もないフリで笑いながら寝室へ逃げ込んだ。

ドアにもたれて目を瞑る。真っ暗な視界に、やっぱりぽっかり浮かんだのはあるはずのない白い月で……なぜか、言いようのない胸のざわめきを感じた。

第二話 名前をちょうだい

職員食堂の入り口にある、簡易なメニュー表を前に立ち止まる。

「美優、決めた？」

「うん、定食にしとく。たまちゃんは？」

「私もー」

内科病棟の同僚の玉岡さん、通称たまちゃんとは職場で一番仲が良い。今日は昼休憩に出るのが遅れて、おかげで胃の中空っぽだけど、幸い職員食堂は空いていた。それほど待つことなく定食のプレートを受け取って、窓際の席に向かい合わせに座る。

「あー、午後だるいよー」

「美優、今日めっちゃ眠そう。昨日寝てないの？」

食べながらあくびをひとつ漏らしたら、たまちゃんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「寝た、けど……それより昨日、なんか変なことがあって」

「変なこと？」

「すごい綺麗な子、落ちてた」

「はっ？」

素つ頓狂な声と同時に、たまちゃんの箸からプチトマトが一個プレートに転がった。

「あんな綺麗な顔、存在するんだな……」

ほんと、遺伝子構造を知りたいわ。どんな組み合わせであの顔とスタイルができあがるんだろ。

「ちよ、ちよつとちよつと、何？ 男の話？」

勘の良いたまちゃんが話に食いついてきたのが面白くて、私は中途半端にはぐらかす。

「手足も長いしねー、あんなん落ちてるんだなあ」

「ちよつ、落ちてるって表現がおかしいから！ まさか拾ったんじゃないでしょうね!？」

「拾った……ことになるのかな？ でももう今日にはいなくなってるはずだけど」

ぱくつと定食のコロッケを口に運んだ。もう雨は上がったし、ゆっくり休んでたとしてももう屋過ぎだ。とつくに部屋は出てっただろう……と、思う。

「ちよつと、詳しく言いなさいよ、あんな全然男の気配しなかったのに」

男の気配、させないように気を遣ってるんです……

たまちゃんの言葉が、さつくりと胸に刺さって私はむつと口を閉ざした。

「あー、まただんまり」

こと、恋愛ごとに関しては話を逸らしたがる私を、多分たまちゃんは心配してくれてるんだと思う。ありがたい、心許せる仲良い友達だ。だけどだからこそ、克之さんのことは言えないでいる。

「あ、宮下先生。外来遅くなったのかな？」

たまちゃんの言葉に顔を上げて、同じ場所に視線を向ける。プレートを手に立っている白衣姿の

その人が私の彼氏だということを、たまちゃんだけでなく誰も知らない。

「宮下先生が外来の日って、患者さん多いもんね」

「……そうだねー」

相槌を打ちながら、私は定食のプレートに目を落として興味のないフリをする。

「いいなー。仕事できるし親切だし、すごいモテるよ」

「そりゃそうでしょ」

「婚約者がいてもいいって、こないだ外科の看護師が騒いでた。実際この病院多いよね。今の看護師長だって内科部長の愛人だって知ってた？」

「へー……」

余り、聞きたい話題じゃない。敢えて素っ気ない返事をする私に気づいて、たまちゃんが肩を竦めて口を噤んだ。職場では、すっかり克之さんの婚約者の存在は有名だ。

ここまで噂になっていっているのに、それでも気にするなと言う。噂を信じるなと言う。そのたび、私は何を信じればいいのかわからなくなる。

噂の真相を、事情があるならちゃんと彼の口から聞きたいのに、いつもはぐらかされてしまう。

克之さんの婚約が本当なら、彼とは別れるしかないのだ。同じ職場だからできるだけ拗れずに別れたいけれど……可能だろうか。そもそも、克之さんと同じ場所で働き続けて、私は平気でいられるだろうか。それから、今のマンションを出て、自分のマンションに戻らなければいけない。荷物をまとめて……

そこまで考えて、ふと、嫌な感情が頭を過った。どうしてこんなに追い詰められないといけないのか……私のほうが、先に付き合ってたのに。

そんな恨み言を、胸の中で言えば言うほど自分が汚くなっていくようで、慌てて思考を断ち切った。

「あー、写メ撮っとけば良かった」

頭の中を無理やり昨夜の出来事に飛ばす。街灯が月明かりを演出したとても綺麗なワンシーンは、一晩経っても鮮やかに思い出せた。

「え、ちよつと見たい、見たかったどんな男？」

「モデルさんみたいだった！」

「そんなのがなんで落ちてるのよ！」

異常に食いつくたまちゃんの顔が必死すぎて、大きな声で笑い出しそうになって必死で堪える。笑いすぎて痛む腹筋を手で押さえながら、たまちゃんの質問攻めをかわした。

……あの男がちゃんと鍵を締めて出てってくれたか見に行かなくちゃ。そうでなきゃ、帰るに帰れないし。

仕事上がりにでも寄ろうと考えていたのだけど、その日は急な入院患者や急変で疲れ果て、ようやく足が向いたのは三日後の非番の日中だった。



「あつっーい！」

克之さんのマンションから病院前を通過して、私のマンションに向かう。克之さんは病院に泊まり込んでいて、まともに会っていない。つまりまだ、話はできていない。

十分ちよいの道程でじっとり汗を掻いて、たまらずに自動販売機でスポーツドリンクを一本買った。

梅雨の合間の晴天で、湿度は高いわ気温は上がるわで、過ごしにくいことこの上ない。

「あれっ……」

あの男に、鍵を締めたら新聞受けに入れといてって言ったのに、鍵すらかかかっていなかった。ノブを回すと、中からむわつと暑苦しい空気が流れてくる。思わず眉をひそめながら、一步玄関に入って足元を見た。

「……ちよつと、まさか」

無言で見つめた先には、三日前に見た、大きなスニーカーがある。まだここにいるのだろうかというよりも、閉め切つて澱んだこの暑苦しい部屋で、生きているのかどうか先に気になった。慌ててリビングに向かい見渡すと、こちらに背を向けたソファの肘置きから長い足が飛び出しているの見える。

「……ちよつと、大丈夫？」

「……ちよつと、大丈夫？」

目を閉じた端正な顔は汗だくで、やはり呼びかけにも反応しない。そっと手を伸ばして軽く手首に、次に首元に触れるとちゃんと指先で脈が確認できた。

「ちよっと！ 起きて、しっかりして！」

先ほどよりも大きな声で呼びかけ、男の肩を同時に揺すった。すると小さな唸り声を上げながら男の目が薄く開いて、ほっと安堵の溜息が漏れる。

「起きた？ 気分は悪くない？」

「あ……おはよう……大丈夫だけど」

むっくりと起き上がった男にとろんとした目でそう言われて、がっくりと力が抜けた。どうして自分が心配されているかわかっていないらしい。

「あなたね……こんな暑い中で寝て、熱中症で死にたいの？」

飲んで、とさつき買ったスポーツドリンクを差し出すと、男は受け取ってもすごい勢いで飲み干していく。喉を鳴らす音を聞いてひとまず安心すると、エアコンのスイッチを入れた。よくもまあ、こんな暑い部屋で寝られたものだ、呆れてしまった。

「水分はなんとか摂れてたから心配ないかなって……あ、ごめん。水道水勝手にいただいたけど」そう言つて男はぺこりと頭を下げると、また背もたれに力なくもたれかかる。

「別に水道水くらいで怒らないけど……」

よくよく見ると、男の顔色は余り良いとは言えない。熱中症の一步手前ぐらいだったのかも、とも思っただけど……どうも、それだけじゃない。

「気分悪いの？」

「いや、平気だよ」

「……もしかして、食べてないの？」

へらり、と笑つた男に、推測が的中したと確信した。いや、この男が空腹なんだろうとか、そういう推測ではなく。先日感じた『男の性質の悪さ』のほうの推測だ。

「なんで。ここは、夏葉が片付けていったから何も残ってなかったでしょうけど、ちよっと行けばコンビニあるのよ？」

「ああ、そうか。じゃあパンくらい買えたかな……」

ごそ、と男がジーンズのポケットに手を突っ込んだ。出てきた手の中で、ちゃりんと硬貨の音がして、つい覗き込むと。

「あー、パンも無理だったか」

大きな手のひらに、十円玉が三つと五十円玉がひとつ乗っかっているのを見た。

「は……こんだけ？ 財布は？」

「多分鞆の中だけど、空っぽだったと思うよ」

多分鞆の中だけど、と突っ込みたい気持ちを堪えて、男のものらしき四角い箱のような肩掛けの鞆に目をやる。男の言葉に嘘はなさそうな様子で……だつて持つてたらこんなに弱つてはいないだろう。

くらりと眩暈を感じながら、聞いてみた。

「……何日食べてないの？」

「えー……つと、ここに来る、二日前くらいだったかな、に、お金がなくなつたから」
指を折つてはつきりした日数を数えようとする男が、ただの馬鹿に思えてきた。

別にそんな正確な数字を求めているわけじゃないつーの！

「……待ってて」

「え？」

「いいから、ちょっと待ってて」

ぎろりと睨むと、男は申し訳なさそうに笑つたけれど。

「ごめんね？」

「うっさい！」

やっぱり、確信犯なんじゃないの！と、苛立ちながらも、私はバッグを手をふたたび外に出た。
謝つたということは、助けてもらえろという自覚があつてあの部屋にいつてことだ。

考えるほどに腹が立つけど……なぜかコンビニに向かう足は止まらない。あの、悪気がないはず
はないけど害のなさそうに見える笑顔と、自分からは「助けて」と一言も言わない様子を見ている
と、見捨てるわけにはいかないと、妙な責任感が背後から追いかけてきて。

すでに一度部屋に泊めたのだ、もうしばらく貸したつて大して変わらない……そう思つてしまふ
ほうが気が楽だつた。

「はい、食べて」

テーブルに、湯気の立つ小どんぶりとレンゲを置いた。

「おかゆ？」

「文句言わない。数日食べてないのにコンビニ弁当やらカップラーメンやら胃が受け付けるわけな
いじゃない」

受け付けたとしたつて、身体に良いわけがない。文句あるの、と正面から睨んだけれど、彼には
さっぱり、効果がない。

「文句なんか言わないよ、ありがとう」

そう言つて、レトルトのただあつただけのおかゆを、美味しそうに啜つた。

「うわー……、すっごい」

「なによ」

「すっごい、美味しい。胃に染み渡る……」

「……そりゃ、そうでしょうよ」

五日も食べてなきや、レトルトだろうが手作りだろうがなんだつて美味しいはずだ。むしろ感心
する。それだけの空腹を抱えて、あの晩も今日も、よくそんなに穏やかにいられたものだ。

一口食べてはレンゲを握りしめて味わう彼に、段々と苛々するのも馬鹿らしくなる。

「ご馳走さまでした」

手を合せて一礼する所作は綺麗だつた。それだけでなく、彼は食べてる間の姿勢もよくてきち

んと躡けられてきたのだろうと感じる。

そんな彼が、なぜ行く当てもないような生活をしているのだろう。まあ……かといって。

「物足りないだろうけど、もう少しお腹の様子見て、後でおうどん作るから」

深入りするつもりはないから、敢えて聞かない。うっかり哀れな事情でも聞いて、またあの笑顔で『大丈夫です』とか言われたら、無駄に私の罪悪感が増すだけだし。

「あ、美優さん、食事は？」

「おかゆ食べてる空きっ腹の人を目の前につり食べられるわけ……、なんで知ってるのよ」

「何？」

「名前よ」

空いた食器をキッチンに下げながら、眉をひそめて彼を睨んだ。

「あ、なっちゃんか、こないだの電話でそう呼んでた」

「ああ、そっか。ねえ、夏菜とはさ」

「はい？」

「あ、やっぱりいいや聞きたくない」

同時に、蛇口を捻って水の音で会話を中断させた。夏菜とどういう関係だったんだろう……と、つい尋ねそうになってしまったけれど、やっぱり聞かないことにした。だって、生々しい関係だったりしたらどう反応すればいいかわからない。

だけど私の聞きたいことはお見通しだったようで。

「美優さんが思ってるような関係じゃないよ」

「そう願いたいけど絶対そんなわけないよね」

すぐさま返すと笑いを含んだ声で「本当なんだけどね」と肩を竦める。さしてこたえてもいない様子だった。

「でも、美優さんは優しいね」

「は？ なんでよ」

「聞いたら厄介なことになりそうな相手だってわかってるのに、助けてくれたから」

男はそう言って、笑顔を見せる。見せられた私は、その綺麗な造形にカチンと腹立たしさのスイッチが入った。

「調子に乗らないで、助けるなんて一言も言ってないから」

「ああ、そっか」

「友達のところでも住み込みのバイトでも、とにかく早く行く場所探さないよ」

「どれくらい？」

「えっ？」

「何日以内に出て行けばいい？」

具体的に期限を設けることを彼のほうから言われるとは思わなくて、一瞬戸惑ってしまった。

「あ、じゃあ……三日くらい？」

「わかった」

当てが見つかるまで置いてくれとか、そんな風に居座られるのかと少し警戒していたから、妙に拍子抜けしてしまう。じつと凝視する私に視線を合わせて、彼は首を傾げた。

「何？」

「……なんでもない。ちよつと写メ撮らせて」

「えっ、なんで？」

「いいでしょ、宿代だと思って」

ソファに座る男に向けて、スマホをかざしてシャッター音を響かせる。日中の室内つて、光の加減が難しい。だけどさすが整った顔してるだけあって、どう撮つてもピントさえ合っていればそれだけで絵になるもんだ。

確認した画像は、やっぱり綺麗でモデルさんみたいだった。後で、たまちゃんに見せて自慢しよう。

「俺、撮られるより撮るほうが好きなんだ」

「ああ、夏菜とは写真仲間なのよね？」

「貸して」と、手を差し出されスマホを手のひらに乗せると、彼は画面をちよつとだけ操作して私のほうへとレンズを向ける。

「えっ、ちよつとやだ！ 汗掻いて化粧も剥げてるのに」

「そう？ でも綺麗だけど」

「えっ……」

「ほら、可愛い顔してる」

四角いスマホの向こうから、液晶画面を見ていた目が不意に上向いて。まるで射抜くみたいなたつの瞳が、画面越しでなく私を見た。

どくん、と心臓が高鳴った瞬間、パシャッ、とシャッター音が鳴る。ほんの一瞬だった。

その瞳に拘束されたように身動きできなかつた数秒からシャッター音によつて解放されて、思わず深く息を吐き出した。

な……なんだつたんだろ、今の。

どくどくどく、とまだ少し早鐘を打つ胸を押さえていると。

「ん、綺麗に撮れた」

返つてきたスマホの画面には、先ほど撮つてもらつた私が写つていた。

彼が撮つた画像は、室内が背景の普通のスナップ写真のはずなのに、なぜか人物……つまり私が引き立てられて見える。構図のバランス、とか、だろうか。

「ね、可愛い」と、男が言つたのにも、頬が熱くなる。

画像の中の私は、確かに時間の流れから綺麗な一瞬を選んで切り取つたみたいに、いわば奇跡の写りだつたけど。それ以上に、ちよつと頬を染めて眉根を寄せた表情が……なぜだか、艶っぽい。

「あ……、うん。ありがとう、ほんとに上手いね」

棒読みで答えながら、画面を閉じた。

うん、本物より美人に撮れてるのには違いないから保存はしときたいけど、余り人には見せたく

ないな。

しばらくしてからおうどんを作って、私のほうにだけ買ってきたえび天を入れて男には溶き卵だけで我慢をさせる。当然、文句なんか言わなかったけど。多分ただの素うどんでも美味しそうに啜ったに違いない。

夕方にもまた雨が降り出しそうな予報だったから後片付けは彼に任せることにして、その前に帰ろうと玄関で靴を履いた。

「じゃあ、もしもどうしても連絡が必要なことができたなら、私の番号にかけてね。で、この家電を使っているけれど、覚えのない番号からかかってきても、絶対出さないで」

「うん、わかった」

あれからこの男と少し話をして、更に厄介なことが判明した。まさか、今時……スマホを持たない若者がいるなんて。念のため、男と連絡が取れるようにと電話番号を聞こうとして発覚したこの事実。

『持っていないわけじゃないよ?』と見せられた携帯は一昔前の傷だらけのもので、しかもずっと前に未払いでストップされてから、ずっと繋いでいないのだという。

『……それでどうやって行く当て探すつもりだったのよ』

『足使って知り合いに会いに行くか、とりあえず近場で住み込みのバイトでも探そうかな、と思っただけだよ』

いや、それほど私もバイト経験あるわけじゃないけど……連絡先も持たない人間を雇ってくれる

とこなんてあるのかしら。あ、ホストとか?

そう思っただけならまた呑気な答えだった。

『俺、夜更かしか苦手』

『そんなこと言ってる場合? あなたなら絶対稼げるじゃない』

そう言っただけ、男の態度はのらりくらりとしたもので、本気で探す気あるのか、と思っただけ。まう。

だけど、自分から期限設けようと言いつけ出したくらいだし、なんとかするつもりはあるんだろう……と、今日のところは思うことにした。

とんとんと靴のつま先で三和土を叩いて踵を収める。一段低い場所に立っただけ、一層彼の背が高く大きく見上げる姿勢になった。

「私との連絡以外に、例えばバイトの面接とか。どうしても電話が必要な時は、ここの電話使ってくれていいから」

「ん、わかった」

「食料はコンビニで数日分買ってあるから適当に。エアコンはつけて。ここで死なれたら本気で困る」

「何から何まで、ほんとにありがとう。ちゃんと行くところが決まったら、連絡してからここ出るよ。いつかけても大丈夫?」

「仕事してたり彼氏がいる時は出られないけど、その時は後でかけ直す」

そう言うと、彼は素直に頷いた。

「彼氏と一緒に住んでるの？」

「そうよ」

一応……と心の中で付け足した。滅多に彼が帰らない状況でも、居を構えているという点ではイエスで間違いない。

「あ、そうだ。名前聞いといていい？」

よくよく考えれば、彼の名前をまだ聞いていなかった。知らなくても構わないが、会話する上で一応聞いておこう、と思ったのだけだ。

「……必要？」

「は？」

まさか、の拒否。顔は笑ってるけど目が笑ってない、そんな表情がこんなにも冷ややかに感じるということ、初めて知った。

「好きに呼んでくれていいよ、なっちゃんもそうだったし」

……夏菜も、そうだったし？

呆気にとられているうちに、「じゃあね、気をつけて」と手を振られ、私はなかば追い出されるように部屋を出る。目の前で扉が閉まった音でようやく我に返った。

「なっ……」

なんつじや、そりゃあ！

たかが名前くらい、教えたってなんの害もないでしょうが！

ここまでしたのになんで……と、理不尽な態度に茫然と立ち尽くす。なんなら今すぐ追い出してやろうかと思っただけど、別に愛想よくして欲しいから助けたわけでもない。見返りが欲しいわけではない。

だけどそれでもやっぱり腹は立つわけで、私は腹いせに扉を一度蹴っ飛ばしてから、鼻息荒くその場を後にした。

「いやいやいや。あんたそれでよく追い出さなかったよね」

ばさっ、と白いシャツが翻った向こう側で、たまちゃんが呆れた顔をした。

金曜の昼間はリネン交換の日だ。患者さんが検査や外来診察に向かっている間に、交換できる部屋から片っ端にやっていく。

「えっ？ だって……一度許したことを腹立つからって覆すのも大人げないと思って」

「えー……」

「助けた自分に酔ってるんじゃないの？ そういう部分に付け込まれるのよ」

たまちゃんは、時々歯に衣着せぬ物言いをする。だから信頼できるという部分もあるけど、それ以上にグリグリ心を抉られることが多い。

別に、酔ってるつもりはないんだけど……と心の中でぶちぶち文句を言うけれど、声に出せない

のは反論できる自信もないからで。

だつて……自己満足のような気持ちには欠片かけらもないか、と言われれば自信ない。行く当てがないと言われて追い出せなかったのは、冷たい人間だと思われたくないという無意識の見栄が働いたための偽善といえる。

「で……そういう感情を巧みに利用しようとするのがヒモってやつ？」

ボフツ……！ と、枕をスプリングマットの上に落としてしまった。

ヒモ。夏菜にとつてそういう男だったのかな、などと、ちらりと思つてしまつていたことを、言い当てられたような気がした。

「大体、名乗らないって怪しすぎるでしょ、ヒモどころか結婚詐欺とかで前科でもあつたりして。美優、気をつけなよ。私らみたいな職業つて、わかつていながらそういうのから逃げられなかつたりするんだから」

「どういう意味？」

「そこそこ高給で生活に余裕はあるけど仕事はきつくて忙しい。一般の会社員とは休みが合わない。寂しい夜に、一緒にいてくれるなら頼りない男でも傍に置きたい。男とふたりなら自分の稼ぎだけで十分食つてけるしね」

「冗談やめてよね」

いくらなんでも、そこまで馬鹿じゃない。それに、たまちゃんには言えないけれど、克之さんと付き合っているのだ。……別れ話を切り出すところだけだ。

恋人に黙つて見合ひして、婚約の噂まで流れるような人ではあるけれど。それが発覚するまでは、誠実な人だと思つていた。社会的地位もあり生活力もあるししっかりした大人の男性と付き合つていて、そんなヒモみたいな男に惹かれるわけがない。

この先克之さんと別れたとしても、そんなやつを男として意識することはない。

だから、たまちゃんが心配するようなことには絶対ならない。心外だ。憮然ぶぜんとして交換を終えた枕をベッドの定位置にやや乱暴に置くと、たまちゃんが肩を竦すくめて笑つた。

「怒らないでよ、冗談だつて、半分は」

「半分って何よ」

「まー……確かに、あの顔なら騙だまされてもいいかなと思うよね」

しみじみと言いながら、たまちゃんがシーツに指を滑すべらせる。今朝更衣室で一緒になつた時に、昨日撮つた写メを見せた途端、たまちゃんは「きゃあ」と黄色い歓声を上げたのだつた。

「つていうか、どうせ騙だまされるならあれくらい顔が良くないと納得いかないわ」

「ねえ、騙だまされる前提で物言うのやめてくれない？」

自分が無理なくできる範囲の人助けをしているだけの話で、あの部屋は夏菜が出ていった後も、解約するつもりはなかった。克之さんと別れてそこに戻るつもりだったのだ。

だからどちらにせよ家賃は発生するし、私に何の被害もないのだ、せいぜい光熱費がかかるくらいで。早いところ彼が行く先を見つけてくれないと、こっちの別れ話が進んだ時に私が住む場所に困る、これが最大の問題だろう。

「数日したら出ていくわよ、きつと」

さすがにそこまで凶々しくない……ことを祈りたい。いつまでも面倒見てやるつもりはないぞ。『っていうか、さあ……』

たまちゃんがポソツと呟く。見ると使用済みのシーツをかき集めて丸めながら、少し思案顔をしていた。

「私、なんか見覚えある気がするんだよね」

「え？ 誰が？」

「だから、その名無しくん。気のせいかなあ……」

「芸能人か誰かに似てるとか？」

「誰よ？」

「わかんないよ、そんなの。誰に似てるの？」

そう聞き返すともう一度、うーん、と唸る。

「いや、似てるとかじゃなく。どこで見たのかな」

たまちゃんはどうしても気になるのか、リネンの交換の間中ずとうんうん唸っていたけれど、結局思い出せないまま交換は終わってしまった。

それから三日が過ぎる。

マンションにいる名無しくんがどうしているのかも気になったが、相変わらず仕事に忙殺されて

様子を見に行くこともしなかった。

仕事が終わってから行くことは十分可能だが、彼がまだいたらそこでまたひと悶着あるわけだ。

……休みの日に行こう。

看護師は激務だ。身体を休めることを最優先しなければ。本当は、考えなければいけないことはいくつもあるのだけれど。

検査室に患者を送った帰りの階段を、三階へと上がっている途中だった。

「美優」

低い声が頭上から降る。下の名前で私を呼んだ彼は、上階から階段を下りてくるところだった。

私は咄嗟に、視線を周囲に巡らせる。

この階段は各フロアとは鉄扉で区切られている職員用のものだ。誰かがいれば声や足音が響く。

今は、私と彼のふたりだけのようだけど……いつ、誰が来るかわからないのに。

慎重な克之さんには珍しい、と思った。

「お疲れ様です、宮下先生」

階段を下りてくる彼と近づく。他人行儀に小さく会釈をする私に、彼が少し寂しそうに笑った。

「拗ねてるのか」

「何の話ですか？」

今、彼は重篤な患者を複数人抱えていて、ほぼ毎日病院に泊まり込んでいる。私達のマンションはすぐ傍なのに、一度着替えを取りに帰ってきただけだ。

そのことを、私が怒っていると思っているんだろう。いつもなら彼のほうが職場では素っ気ないのに、こんな風に声をかけて私の機嫌を取ろうとしている。

「食事はちゃんとしているのか？」

私のいる段まで、あと三段。

「それが心配なのは克之さんのほうでしょ」

忙しいのは私もだけど、克之さんほどではない。職員食堂があるから、温かい食事にはありつけるはずだが……それも、時間があればだ。患者の急変があれば、食べ損ねることも多いはず。

「ちゃんと食ってるよ」

近づいてくる克之さんの顔色をつい観察する。疲れてはいそうだけれど、顔色はそれほど悪くはない。

心の中で密かに安堵あんどしていると、すれ違いざまに、彼が突然手を差し伸べてさらりと髪を撫なでた。驚く私の耳元に、顔を近づける。

「忙しくてごめん」

驚いて声も出せない私の耳たぶに唇で触れて言い残す。

上げかけた声はどうにか呑み込んで、階段を振り向く。すたすたと階段を下りて、地下の検査室のほうに向かう彼の白衣の背中を見送った。

……誰かに見られたらどうするのよ。

私は、小走りで階段を上がる。三階フロアとを隔へだてる鉄扉のところで一度深呼吸をした。顔が熱

い。触れられた耳たぶを手で押さえると、そこも熱かった。

「……もう」

きつと真つ赤だろう。少し冷えてから仕事に戻らなければ。かといって顔を洗いにいくわけにもいかないし、この場でパタパタと手で顔をあおぐ。

……信じたほうがいいのかな。

見合っただけしかしていない、と言った彼の言葉を、私はもつと信じるべきなのか。だって、そのことを私が問い詰めたりしなければ、それ以外の時は彼は本当に優しい。今までと何も変わらないのだ。動じない彼を見ていると、信じない私が悪いような気になる時がある。

流れる噂を彼がいちいち否定しないのは、本当に馬鹿馬鹿しいと思っているからかもしれない。それに、もしも本当に院長の孫娘と結婚するつもりなら、最初から不誠実なことなどしないだろう。たとえその結婚に愛情などがなかったとしても、だ。

克之さんと付き合っただけで、浮気をされたことはない。元々、言い訳めいたことをわざわざ口にする人ではないから、私に対して特に説明がないのもその必要がないからだろう。

だって、聞いた時も彼は本当に、馬鹿馬鹿しそうに、してた。

『噂なんか振り回されるな』

その時の横顔を不意に思い出してしまい、ぎくりとした。疑う私が煩わづらわしかったのか、目を逸そらして私を見なかった。

ずきん、ずきんと胸が痛む。

こんなにも私が疑うようになったのは、あの横顔が原因なのかもしれない。何が怪しい、とかはつきりと言えるものは何もない。だけど勘のようなものが、ずっと私に訴えかけていた。本当に信じていいのか、と。

きゆう、と胃までが痛みを訴え軋み始める。お腹を押さえ痛みが治まるのを待っていると、熱くなっていた頬もいつのまにか冷めていた。



「まー……予想はしてたよね」

『えっ、何が？』

仕事帰りにスーパーに向かって歩きながら、試しにマンションに電話してみると案の定繋がった。常識に沿って考えたらそろそろいなくなってるだろうと思ってたけど、いざこうして声を聞いてみると『やっぱりいたか』と思ってしまふ。

「なんでもない。ちよつと今から行くから」

夕飯を何か作るか、面倒だし惣菜でも買おうか悩んでいたけれど、この男がいるなら二人分……弁当でも買おうか。

通話を続けながら、スーパーの入り口で黄色いカゴを手を取った。

『あ』

「何？」

『夕食、もしかしてまだ？』

「そうだけど。……わかってるわよ。どうせもう食べ物ないでしょ、あなたの分も……」

『いえ、そうじゃなくて。買ってきて欲しいものがあつて』

「凶々しいな！」

『あははは。すみません』

余りにもざらつと言うから、咎める言葉も冗談交じりになってしまつて。

「で？ 何が食べたいの」

結局、希望を聞いてしまうのも、彼の思惑通りだったりするんだろうか。

彼がリクエストしたのはお弁当やお惣菜の種類ではなくて、食材ばかりだった。その時点で、何か作るつもりなのだろうとは気がついたから、言われるままに買い物を終える。

マンションに行くのと彼はすぐに夕食の準備に取り掛かってくれた。見ていると、驚くほどの手際の良さで、手伝おうかと言う隙もない。そしてほんの三十分ほどの間にサラダとパスタとスープを完成させてしまった。

「……美味しい」

仕事の後でかなりの空腹だったということもあるけれど……これは。

「そう？ 良かった」

くるくるとパスタをフォークの先に巻き付けて、次々と口に運ぶ。

「ごめんね、美優さんお腹空いてるだろうと思って余り時間かけずに作ったから。本当はもっと丁寧に作ってあげられたら良かったんだけど」

「ううん、十分。久々に美味しいパスタ食べた」

クリームチーズとトマトとベーコンのパスタは、盛り付けも完璧だ。彩り鮮やかに、白いプレート中央に上品に盛られ、黒胡椒くろこしゅうも美しく振られていた。

見た目だけじゃなく味も完璧で、空腹だった私は、もっと味わいたかったのにあつという間に平らげてしまった。

「……ごちそうさま」

味の余韻よゐんに浸りながら、ほう、と溜息を漏らしてしまう。お腹もいっぱいですい呆ぼうけてしまっていたら、珈琲コーヒーの入ったマグカップがごとりと置かれた。

「あ、ごめん！ 私の分まで」

「いいよ、後でまとめて片付ける」

私のお皿まで全部下げてもらって、食後の珈琲までお世話になってしまった。……いや、食材費は全部私だけだね。

「これ活かした職に就いたら？」

「作ってあげたい人にだけ作ってあげたいんだよね」

「そんな生意気な持論は、ちゃんと働いてる人が主張するものよ。はい、これ」

また、どこの職人だみたいな頑かたくな言葉ことばを吐くものだから、折角料理を作っていたいただければ

どもそうそうに話を切り出す。彼に差し出したのは、食材と一緒にスーパーで買ってきた履歴書だった。

「親戚や家族には頼れないのか頼るところがないのか、そういうことなんでしょ？ だったら早く住み込みの仕事探して」

この数日、うちの電話を使ってもいいとまで言ったのにそれでも行く場所がないってことはそういうことなんだろうと、結論付けた。差し出されたまま受け取ろうとしない彼の手に、ビニール包装された新品の履歴書を押し付ける。

「……あんまり、長く居座られても困るの。彼に知られたら良い顔するわけないし」

その彼とは、正直どうなるのかわからないのだけれど。それを口にするすと隙すきを見せるような気がしたのでやめた。

彼は数秒躊躇ためらった後、やっと履歴書を手に取る。

「そうだよ、ごめん。なるべく早く探すよ」

「って、こないだ三日以内って話してたのに」

「いや、うん。そのつもりだったよ？ ちゃんと」

へら、と笑いながら彼は視線を逸そらした。

「まったく、男なんだからちよつとしつかりしなさいよ」

「ごめんね。そういう美優さんは、優しくしてしつかり者だね」

履歴書を手にして眺めながらそう言う彼に、なんだか馬鹿にされたような気になって上目使いに

睨んだ。

「どういう意味よ、すっかりしすぎて可愛げないとも言いたいの」

「なんでだよ、褒めてるのに」

私の睨みを困ったような苦笑いでするりとかわして、「ただ」と言葉を繋げる。

「しつかり者の女性って、特別に甘える場所が必要なんじゃないかなって印象だから。きっと彼が上手に甘えさせてくれるんだね」

彼が柔らかに微笑んだのに反して、私の心からびきつとひび割れた音がした。

「うん、そうよ。お医者さんだから、将来も安泰だし」

「そうなんだ」

「年上だから、たくさん甘やかしてくれるし。忙しいからなかなか時間合わないけど、仕事だし仕方ないってちゃんとわかってるし」

「頼りがいのある彼氏だね」

「うん、そうなの」

言葉にすれば、少しは現実味が増す気がしたのに。

言えば言うほど、苦しくなってしまうのはなんでかな。

「……大丈夫？」

「え？」

「いや……気のせいならいいんだけど」

心配そうに私の顔を覗き込む彼を前に、私は上の空だった。

「ずっと、君のことが気になってた。」

「好きだよ、美優。」

「そんなに心配なら一緒に住もう。引っ越しておいで。」

もらったたくさんの言葉にしがみついて、信じようとした。最初は、信じようとしたのだ。

『大丈夫、大丈夫』

そう必死に言い聞かせて、一体どれだけひとりの時間を過ごしてきただろう。だって誰にも言えなかった。自分ひとりで、考えるしかなくて。

「ごめんな美優、ちゃんとするから。」

『ちゃんと』の意味すら曖昧に誤魔化そうとして、別れ話も聞き入れず。私を中途半端に縛り続けるあの人から、もつと毅然として離れるべきだったのか。

これから先もずっと続くのだろうか。報われる未来が想像できない。そんな絶望を感じて途方に暮れそうになった時。

「……俺ね」

穏やかに柔らかな音色が突然、耳から入り脳に浸透した。

「え？」

「ほんと、昔っから頼りないだとか、ぼーっとしてるってよく言われる」

柔らかな声はそのままに、自虐めいた独白がいきなり始まって私は目を瞬いた。

「そう、なんだ」

「子供の時からそう。兄貴ふたりはすっげえ出来が良くてね。俺はなんかずーっとぼーっとしてた」

「ぼーっとしてる、って自覚があるってすごいよね」

「なんだか言いぐさが可笑しくて、くすりと笑いながらそう相槌を打つと彼も笑った。

「自覚あるよ。ぼーっとしてなきや雨の中、何時間もずぶ濡れで待ったりしないよね」

「あはは、確かに」

「子供の時にも何度かやったよ。傘持つてるのに、ささずに歩いて怒られたこともある」

「なんでささないのよ」

「好きなんだよ」

「雨に濡れるのが？」

「目の前の景色が、天気で様相を変えていくのを感じるのが。雨は雨で味があるし虹が出れば綺麗だし。折角の移り変わりを傘で邪魔されたくないし、その中の一部になりたいから雨が降るなら肌で感じたい。元々そういうやつだから、雨に濡れるのは全然苦じゃないんだよね。あ、ちよっと待って」

名前も名乗りたがらないくせに、急に随分饒舌になったな、と不思議に思いながら、突然立ち上がった彼を目で追った。

部屋の隅に置いてある四角いバッグに歩み寄り、中から一眼レフの随分重そうなカメラを手に取

ると、何か操作しながらテーブルへと戻り私の隣に腰掛ける。

「見て」

見せられた一眼レフのそのカメラには液晶画面がついていて、デジカメなのだとすぐにわかった。中に収められている写真が液晶画面に映し出されていて、彼がボタンを押すたびに画像が切り替わる。

「うわ……綺麗」

「すごいでしょ、これなんか雲の形と茜色の差し具合が絶妙で」

「空を撮るのが好きなの？」

「なんでも。景色でも人でも、綺麗なものの一瞬を切り取るのが好きなんだよ」

夢中で語る彼の目は、きらきらしてまるで子供みたいだった。

「あつ、これ！うちのベランダから？」

「そう。昨日の夕焼けの一瞬」

「すぐ。山の手にあるし結構景色は良いほうだと思ってたけど……」

彼の手で撮られたら、こんなにも綺麗な景色に切り取られるんだ。感心しながらまた次へと画像を送って、いつのまにか夢中になっていた私は。

さっき追いつめられた『絶望』から、ほんの少しの間、逃れることができていた。

彼には出て行ってもらわないといけない。そう思っていることに変わりはないし、ちゃんと職探

しているか、都度聞くようにはしている。

そんな風に自分を分析しては妙に安心してみたりするけれど、なんだか少しずつ、彼に気を許してしまっているのは気のせいじゃない。

何日かごとに数日分の食料を持ってマンションを訪れて、ついでに彼の手料理をいただく。

そんなことを何度か繰り返したある日。

今日は久々にたまちゃんとシフトが合って、昼休憩と一緒に職員食堂を訪れた。

「暑いから食欲湧かないね」

「そうだねー……」

メニューの前に、ふたりで悩んだけれどなかなか決まらな。先日梅雨明け宣言が出されてから、連日記録更新じゃないかと思うような、猛暑が続いていた。

「……冷たいものなら入りそう」

「私も。冷麺にする」

冷麺をカウンターでもらって向かい合わせに席に着いたが、やはり箸が進まない。

「……こないだ作ってくれた冷製茶碗蒸し、美味しかったな。」

彼の料理をつい思い出してしまうあたり、私はすっかり胃袋を掴まれているらしい。職員食堂の食事にそれほど不服はないけれど、どうやら舌が肥えてしまったみたいだ。

冷たくて美味しいはずの冷麺も、なんだか味気なかった。

「あつ、見てみて！」

「えっ？ 何？」

たまちゃんがいきなり興味津々といった顔でちらりと視線を向けたのは私の後方。振り向いて、後悔してしまつた。

テーブルをふたつ挟んで、克之さんとその向かいに座る女性の姿を見つけてしまったから。

ずきん、ずきんと胸が痛むのを、大丈夫、大丈夫と唱えて誤魔化して、たまちゃんの声にできるだけ平静を装って返事をした。

ふたりでいる姿はもう何度もこの場所で見ている。

「あれ、婚約者だね。うちの姉妹病院で看護師してるんだって」

「へー、そうなんだ」

働かなくても全然大丈夫だろうに、看護師なんてキツイ仕事やってるんだ。

「院長の孫なんだもん、働いてたつてなんか色々優遇されそうよね」

私がぼろりと零した言葉に、たまちゃんが驚いたように目を見開いた。

「何？」

「いや、美優にしては珍しく、さらりと毒吐いたなと思って」

「……そ？ 毒っていうか、みんなそう思つてそうじゃない？」

「ま、その通りだけどね」

軽くかわしたけど、言うんじゃなかったと後悔で泣きそうだった。

私と克之さんのことをたまちゃんが知っていたら、きっと醜い嫉妬だとすぐに気がついたと思う。

惨めな気分と、背後に今もいるだろう克之さんの婚約者の存在に押しつぶされそうで、息苦しくて仕方ない。

「休みにたびたび婚約者のとこに顔出しにくるなんて、絶対周囲への牽制よね」
たまちゃんのその言葉で、気持ちがまたゆらりと揺れた。

周囲への、牽制。

「そう……なの、かな」

相槌を打ちながら、私の心臓は早鐘を打っていた。

……もしかしたら、私の存在に彼女も気がついているのかもしれない。

そのことが頭から離れなくて、その日は仕事をしていてもすぐに気が散って、途中で何度も両手で頬を叩いて気を引き締めた。

怖い、と思う反面、気づいてしまえばいい、とも思う。

私ばかりが、どうして苦しい思いをしないといけないのか。先に付き合っていたのは私なのに、彼女は堂々と克之さんの婚約者のような顔をしている。

卑屈な感情が頭をもたげ、仕事上がりの私を揺さぶる。メッセージを作って、送信する手前で指が止まっていた。

——今夜、会える？

婚約者が来てたんだ、今夜はきつとふたりで過ごすに違いない。もしも、メッセージの着信音を

彼女が聞いたら？

『誰から？』なんて会話になったら克之さんは何て答えるんだろう。彼女は私の存在に気づいてるんだろうか？

気づいてないなら……気づけばいい。

そんな仄暗い闇に捕まりそうで逃げたくて、醜い自分になりたくなくて必死で足掻く。気づいたら、ひたすらマンションに向かって歩いていった。

一昨日行っただけで、まだ十分食料もあるはずで今は行く理由がない、『彼』のいるマンションに。

メッセージはまだ、送信せずにいられた。

エレベーターのボタンを連打して、早く早くと心が急ぐ。ようやく到着した階を早足で進んで、部屋のすぐ傍まで近づいた時、足が止まった。

「あれ……美優さん？」

部屋の前で、あの四角いバッグを肩にかけて立っている彼がいたから。

……出て行くこと、してるんだ。

その姿を見て咄嗟にそう思って、酷く裏切られたような気になるのは、あまりにも身勝手だ。でも、自分が誰にも必要とされてない気がした。

私は要らない人間なのだと、言われているような気がした。

「どこか、行くの？」

そう尋ねた私は、どんな顔をしてただろう。きっと、縫すりつくような情けない表情をしていたに違ちがいない。

「あ、うん。今から……」

だから彼は、じつと私の表情を窺うかがった後、新聞受けに入れようとしていた鍵を、そつとポケットにしまったのだと思う。

本当は今夜出ていくつもりだったのだと、その時確信したけれど。

「ちよつと公園まで行こうと思って。すぐその、高台で景色が綺麗きれいなところ」

話をすり替えてくれた彼に、気づかないフリをした。縁ゆかりも所縁ゆかりもない、しばらくの間寝床と食料を提供しただけの間柄に過ぎないのに、彼は私を見捨てられなかったらしい。

それほど今、私は酷むごい顔をしているのだろうか。

「写真撮りに行くの？」

「うん、そのつもりだったんだけど……美優さんは？ 今日はどうしたの」

相変わらず、彼の声は柔ならかく耳から脳に、そして身体全体に浸透しんとうする。優しく、私の心に触れるように。

「……食欲なくて。こないだの冷製茶碗蒸ちやわんむしが食べたくなかった」

「あはは。あんなので良かったら。じゃあ今から」

「ううん、公園行くんでしょ？ 一緒に行つて見てる」

「いいけど、お腹空いてない？」

「平気。それより、写真撮るとこ見てみたい」

私がそう言うと、彼は私に歩み寄り「退屈たいくつだよ？」と言いながらも、そつと背中に手を当てて、外うへと促うながしてくれた。

夕焼けから徐々に夜に移り変わる空、それから色の変かわっていくシーソーやジャングルジムまで。いろんな角度で思いつくままレンズを向けシャッター音を響なかせる。

見ているだけでも、まったく退屈たいくつなんかじゃなかった。

「今日はなんか、哀あはしいことでもあったんじゃないの？」

「何、急に」

シャッター音と移り変わる空の色に浸ひたってぼんやりとブランコを揺らしているうちに、私の心は随分ずいぶんと落ち着きを取り戻もどかして、不意打ちの彼の言葉にも平然とそう答えた。

「ん、なんとなく、だけど」

その間も止まらなかったシャッター音が。

「なんにもないつてば。あの茶碗蒸ちやわんむしが食べたかっただけなの！」

私がそう言った後、ぴたりと止やんだ。不思議に思つて空へ向けていた視線を下ろす。彼が薄闇の中私を見つめて、困ったような笑みを浮かべていた。

「美優つてちよつと強がりだよね」

「……なんで急に呼び捨てなの」

「なんか頼りなげで可愛いから。言つたでしょ、甘える場所が必要だつて」

じやり、と砂交じりの土を踏む足音が近づいてくる。ブランコに揺られる私の目の前で立ち止まると、ゆっくりと私の反応を見ながら手を伸ばして。

私の頭を撫でるように手のひらを沿わせ、そっと自分の胸に抱き寄せた。こつ、と固い胸板に私の額が当たる。

瞬間、ふわりと彼の肌の匂いがした。

「よしよし」

「……何よ」

「今日はちよつと、いつもの甘える場所が遠かった？」

ふっと旋毛あたりに柔らかいものが触れて、温かい息がかかった。

「大丈夫、大丈夫」

おまじないのようなその言葉を、彼の声で聞いた途端、じん、と目の奥が熱くなる。

遠いのは今日だけじゃない。

段々と遠くなっている気がして、しかもその場所は私だけのものじゃないかもしれない。だから離れようと思うのに、鎖に繋がれたみたいにあのマンションから出られない。

心のどこかで、克之さんを信じたいと思っっているからだろうか。そんな自分が、浅ましく感じて、もう苦しい。

声を出したら泣き出してしまいそうで、何も返事をする事ができなかった。涙目なのを見られそうでも顔も上げられずにいる間、彼はずっと私の頭を撫で続けるから、いつまでも涙の気配が消え

なかった。

仏頂面ぶつどうめんでテーブルに座っていると、目の前にホカホカの茶碗蒸ちやわんむしが置かれた。

「冷製じゃない」

「うん、冷やすにはちよつと時間が足りないんだよな」

わがままを言う私に、彼は笑って「ごめんね」と言った。別に、本気で文句を言ってるわけじゃない。彼はまったく悪くないし、謝る必要だつてない。

我慢して泣くのはなんとか堪えたけれど、それを確実に悟さとられているだろうという気まずさが、私にわがままを言わせただけだ。

「明日、来てくれるなら作つてあげるよ、冷製茶碗蒸ちやわんむし」

「……」

「どうする？」

「……日勤だから、今日と同じくらいに来る」

ぼそ、とそう言っつて、茶碗蒸ちやわんむしをスプーンで掬すくった。

「おっけ。それまでに作っつておいてあげる」

「生意気……ポチのくせに」

ふうふう、と冷ましながら茶碗蒸ちやわんむしを一口食べる。スプーンを咥くわえてちらりと横を見ると、ぽかんと口を開けたポチが私を見ていた。